

あゆみ通信

VOL. 173

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

親鸞のことば

浄土への道を歩む

他力と言うは、如来の本願力なり 「教行信証」

「他力」とは他人のふんどしではなく、「如来の本願力」、阿弥陀さまの本願の力を指します。

私個人の欲望から最も離れた、すべてのものを救うまでは自分は仏とならないと言う誓いが阿弥陀さまの本願です。

私たちは、如来の本願力に支えられて、浄土へと道を歩むことが願われています。それは日々の生活の中で、自分たちがいかに「私の願い」を優先させているかを教え続けられる歩みです。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

如来にたまわりたる信心

父母の逝去と言うご縁から、即應寺に通うように。そして藤井善隆住職(当時)の勧めで、折から宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要のお待ち受けの取り組みで、前回から10数年が経過して開催された第2組2期推進員養成講座に即應寺のご門徒さんと参加し、最終日、第2組の多くのお仲間と共に本山御影堂で宗祖親鸞聖人の御前で宣誓して早くも15年になります。これまでの間、出来る限りの聞法会に参加。そして、即應寺の前住職や住職はじめ多くの先生から宗祖親鸞聖人の本願念仏、摂取不捨の教えを聞かせていただき、「如来に賜った信心」について考えるようになりました。

毎朝、お朝事でお内仏前に座り、お勤めをしますが、時間が来るとお内仏の前に座ってお勤めをすると言うのは、ある意味、自力の結果ではないのかと。確固たる信心が自分に決定して念仏しているのではなく、時間の流れるままにしているだけではないのか。それも、ある意味、法蔵菩薩のお導きではあるのでしょうか。聞法第一。続けましょう。(本)

ただごとでないのち

宮城 顥^{しずか}先生は、「先祖から賜ったこの身がただごとではない。この身というものがただごとでないのち



故宮城顥先生

だという驚き、喜び。一言で言えば、自分自身に感動する。自分の人生に感動する。そう言うことがあって始めて供養になるのでしょうか。それが無かったら結局形だけに終わる。先祖供養と言っても、心に何か、区切りをつけて、やれやれ気が晴れましたと言うことで終わる。そういうただごとでないのちと言う目覚めにおいて、そのいのちを大事に生きる。そういう歩みとして私に真実の法を求め、聞かしめ、聞法へ促す存在として先祖が受け止められた時、その先祖は諸仏となるのです。ですから、私が聞法者になる時に、先祖は諸仏になるわけです」と教えられます。

でも無数の親たちの先祖は、私と一緒に迷って下さり「お前、仏法を聞いて、念仏を称えて、本願を信じて、どうかたすかってくれ」と願っておられます。

(藤井善隆〈即應寺前住職〉)

2017年8月の法話より)

門徒会員研修会と合同研修会

日時 9月8日(金) 13:30

会場 光照寺(天王寺区上汐)

講題「人間成就」

講師 松井 聡先生

(門真市 心願寺住職)

第2組お馴染みの先生です。ご来場をお待ちします。

第2組聞法会「共に学ぶ正信偈」

日時 9月27日(水) 14:00

会場 憶想寺(浪速区恵美須町西)

講師 新田 修巳先生

(平野区 正業寺住職)

参加費 500円

第2組最後の聞法会です。ご参加をお待ちしています。

第2組聞法会「共に学ぶ正信偈」7月が開催されました



7月22日(土) 午後2時から、阿倍野区の法山寺(藤原憲住職)で第2組聞法会「共に学ぶ正信偈」が開催され、組内の住職や寺族、門徒や推進員など25名が参加しました。

墨林浩組長(光照寺)の開会で、藤原憲法山寺住職の調声により正信偈、和讃、回向を全員で勤めました。

講師は10数年にわたり御出講いただいている新田修巳先生(平野区正業寺住職)です。



故坂本龍一氏



糸井重里氏

先生は冒頭、『正信偈』の主な骨子は「称名念仏」である。その歴史を七高僧の功績をたどりながら、私たちがこうしてお念仏を受け止めさせていただいたこの身を、もう一度自覚させていただくのが学びの基本だと話されました。

そして、先ごろ亡くなられた作曲家の坂本龍一さんが、演歌歌手の前川清さんに作曲

された「雪列車」(糸井重里作詞)の一節「あたたかいものをください。こころもからだも寒すぎるのでどうぞ」を聞いて、まさにそれがお念仏であることに気付かれたと。

そこから「称名念仏」が信仰告白の言葉であることについて、善導大師の『観經玄義分』の「無量寿というはこれ法、覺とはこれ人なり、人と法ならべてあらわす、ゆえに阿弥陀仏となづく」を紹介されました。

またご自身が信心定まらない時に、曾我量深師の「信に死し、願に生きよ」というお話に出会い、今日があるとして、曾我先生著作の『地上の救主』にある「如来は我なり」「如来我となりて我を救いたまふ」「如来我となるとは、法蔵菩薩降誕のことなり」について話されました。(法話要旨は別項)

新田先生法話聞書 佛足寺 細川克彦



の言葉であるとおっしゃいました。

先生は長い間、何かを求めているような気がするが、今になってそれはお念仏であったと分かりましたと。

称名念仏は私にとってどのようなはたらきのかと言うことが今でも課題であるがと話され、用意されたレジメの中より、竹中智秀先生の「正信偈」講録



故曾我量深師



『「正信偈」を貫く本願の教え』より引用されました。

その中で、竹中先生にご縁のある御同行のお話として、その御同行の母親が寝たきりとなり、自分がパートから帰ってくるなり、汚れたおむつを取り出して「洗え」と命令された時、頭に血が上って逆上し、「死んでしまえ」と言い、「死ねないなら殺してやろう」と手が母親の首にいき、本当に母親を殺しそうになると。

しかし、そういう時、南無阿弥陀仏と念仏の声が出てくださるとお同行は言います。南無阿弥陀仏と念仏の声が出てくださると、不思議なことに、首に手をかけて絞め殺そうとして



いるその母親に、「すみません」と素直に謝ることが出来ると言う。南無阿弥陀仏は「称える念仏」ともなるし、「聞こえる念仏」ともなりますと。

新田先生は称える念仏を通して、阿弥陀如来のお心と、罪深い身であることを自分に自覚させてくださる、それが大事なことであったとおっしゃいました。

休憩の後、昭和36年に親鸞聖人700回御遠忌法要の讃仰講演会での曾我量深先生の「信に死し願に生きよ」を聞くことによって、後々になって、真宗を離れることの出来ない身にさせていただいたご縁であったと話されました。

「信に死し」とは、身の臨終ではなく、信心の決定の時であり、「願に生きる」とは、即座に法蔵菩薩の存在を身に自覚し、その願心に生きていくことであると話してくださいました。

所長巡回第2組で



去る8月18日(金)午後6時から天王寺区の光照寺(墨林浩住職)で、大阪教区から禿信敬所長と教務所スタッフを迎えて第2組所長巡回が開催されました。組内からは住職や坊守会、朋友会役員や門徒会役員と会員、推進員代表者など21名が参加しました。



これは7月に行われた「教区会」「教区門徒会」で承認された内容と宗派経常費依頼や宗派の現状や教区運営方針の伝達等説明の年間定例行事であります。懇親

も兼ねて行われているものです。墨林組長の進行で最初は宗派経常費の完納表彰などと、憶想寺住職の襲職による神保朝幸前住職および故神保恵子前坊守さんへ(代理は神保朝成住職)感謝状が所長から手渡されました。



その後、禿所長をはじめ教区職員から上記の御報告をいただきました。終了後、コロナ感染下で途絶



えていた懇親の時間がお齋をいただきながら、久しぶりに持たれ

歓談しました。